

npo-if

世界史研究所

Research Institute for World History

RIWH

ニュースレター

Newsletter

No. 2

2004年9月

発行：NPO-IF 世界史研究所
千葉大学文学部史学科西洋史研究室

世界史という妖怪は未だに徘徊している ※趣旨

西川 正雄

※本稿は『日本歴史学協会年報』別冊（2002）、90－97頁に掲載された論考の趣旨。
論考の全文は世界史研究所ウェブサイトでも閲覧可能。<http://www.npo-if.jp/riwh/index-j.html> → 「Digital Library」

1) 1949年夏に当時30歳台の（やがて錚々たると言わることになる）歴史家を集めて「世界史の基本問題」と題する座談会が開かれ、その記録が新たな論稿とともに『世界史の可能性』（東京大学協同組合出版部、1949）として公刊された。本稿の表題は「共産党宣言」の有名な文句をもじったかのようだが、じつはこの本の尾鍋輝彦さんによる序文の中の「一つの怪物が、1949年の日本に突如として現れた、社会科世界史という怪物が」という文章を下敷きにしてる。

なるほど、「世界史の哲学」といった用法はあったにしても、「世界史」が歴史学との関係で問題にされ始めたのは、「社会科」の導入がきっかけだった。なればこそ上記の座談会も開かれたのであり、解説で尾鍋さんは「歴史の解釈として、京都学派や文化伝播説を非とし、発展段階乃至自己発展的見方を是と」する意見が大勢をしめたと述べている。同じ頃、綱領で「世界史的立場」をうたっていた歴史学研究会はその大会で「世界史の法則」をテーマに掲げた。

だが、その歴史学研究会の全体会ですら、いまだに世界史的な立場からの議論が難しく、「日・東・西」から1本ずつ報告者を立ててその場をしのぐことが多い。高校歴史教育の場においてでこそ「世界史」という概念が定着し、さまざまな工夫が凝らされてきたが、大学で「世界史」に正面から取り組む例はほとんどないままである。先の座談会では、「社会科世界史は、従来の東洋史と西洋史を合併した外国史ではない」など、貴重な指摘がすでにされていた。それから半世紀あまり、いくつもの「世界史講座」は出版されているが、「世界史」的な観点がどこまで広く共有されるようになったであろうか。怪物が「未だに」徘徊していると題した所以である。

2) 「世界史」という発想はいつどこで生じたのか、という問いに答えてくれる仕事として岡崎勝世さんの『聖書vs.世界史』（講談社、1996）を挙げたい。彼は、「聖書の記述に基づいて書かれた世界史」を「普遍史」と呼び、それが17世紀頃から崩れざるを得なくなって「世界史」へと移っていった事情を説得的に述べている。指摘して置くべきは、そのような「普遍史」にしても、それに代わって登場した「世界史」にしてもヨーロッパの産物だった点である。今では批判の対象となっている「ヨーロッパ中心主義」はヨーロッパの強烈な主体性の現れであって、それを克服するのは容易ではない。

3) 「世界史」とは何かを考える上で、第5回西ドイツ＝ポーランド教科書会議（1982年）において「普遍史と国民史」というテーマのもとに行なわれた2つの報告は示唆に富む。ここで用いられた「普遍史」という言葉はむしろ岡崎さんの「世界史」に近い。報告者の一人、ポーランドのイエジ・トポルスキは、すべての地域・国家などの歴史、諸文化の共通点と相違点、そして経済・政治・意識などあらゆる種類の歴史的連関、という三つの次元の分析を含む新しいモデルの構築が必要だ、と述べている。¹

4) マルクス主義的発想にもとづく「発展段階論」はかつての影響力を失った。たしかに単線的な発展段階論に世界のさまざまな地域の歴史を「プロクリステスのベッド」のように当てはめて済む問題ではないことは明らかである。だが、「世界史」の大きな枠組みとしてであれば、発展段階という考え方也有意義なのではなかろうか。

5) 世界史の面白さは、水平的あるいは垂直に、自分とは違う人との出会いの場だというところにある。具体的な例として、同時代人ではあるが、自分とは異なる歴史的体験をした人々との「国際的対話」を挙げてみたい。とくに「加害者」と「被害者」という立場の違いを背景にした対話は「世界史」への視野を広げてくれる。「比較史・比較歴史教育研究会」の経験の中からいくつかの考え方の方向が浮かびあがってきたが、その一つは、歴史認識は多様であり、したがって教科書も多様であるべきだ、ということである。

6) とくに教科書作りとの関連で、歴史研究の「共有財産」もしくは史料批判という問題に触れておこう。「言語論的転回」なる動きに乗って、あるのは言説だけであり歴史には事実も真実もない、という主張がかなり大きな声で言われるようになっている。なるほど、歴史認識は多様である。しかし、どのような歴史を書こうがすべて言説として対等だとは断じて言えない。歴史学の場合、史料に基づくだけではなく、史料批判を行なうのが根本である。それによって言説同士の対話が可能になるし、「共有財産」も蓄積される。さもなければ教科書作成など不可能であろう。

7) 歴史教育を通じてわれわれは「何を次の世代につたえるのか」という問題に触れたい。もしわれらの子孫に絶望するのであれば、もはや歴史研究自体の根拠が失われ、ましてや歴史教育は意味がないことになろう。日本では、上原専禄さんの影響もあってか、「国民」のための歴史教育という考え方方が国家主導に対抗するものとして重視してきた。公教育がナショナルな枠組みでなされている以上、無理ないことである。だが、アメリカで発表された *National Standards for World History* (Los Angeles, 1994) が、われらの子孫に関して “educated citizen” という言葉を使っていることは参考になろう。良き「国民」よりも良き「市民」を作っていくことを目指すべきではないか。指導要領にあるような無葛藤な歴史を教えていては良き市民は育たないであろう。

日本の世界史の教科書は、他の国々の場合に比べ、相対的によく出来ている。そのことにもっと自信をもち、お互いに批判を重ねていくことによって、われわれ自身の世界史研究・教育の展望も開けるのではなかろうか。

¹ Patrick Manning, *Navigating World History* (New York, 2003) は、最近アメリカで盛んになった世界史教育の主導的人物の仕事でたいへん参考になるが、「連関 (connections)」のみを重視している感みがある。

*この「趣旨」では、分かり易くするために、もとの文章には無い表現を用いたところがある。注も本ニュースレター向きに新しく付けたものである。

サイバー研究所の未来

小澤 弘明

※本稿は2004年7月10日、世界史研究所開所式での講演を要約し、文章化したものです。

現在、人文科学だけでなく、自然科学や社会科学においても「社会のための科学（Science for society）」という言い方がされています。この言葉の意味内容は、第1に、大学はイノベーションのシステムの中核的存在にならなければならぬといふことです。第2に、大学はファクトリーとみなされていて、日本の産業競争力強化のために動員されようとしている状況があります。第3に学生教育に関しては、教育とは商品であって、学生が教育を受けることとは、その商品を消費することであるとされています。それでは人文科学はどういう場所を確保すべきかという問題があります。今、私が議論しているは「市民のための科学」ではありません。この場合の社会とは、産業界をイメージしているものなのです。

そこで、世界史研究所という在野の研究所の意義を、3つあげたいと思います。これは、NGOやNPOなどの本来的な意味であります。1つは、権力から遠いところにあるということです。もう1つは、営利や効率性からも離れたところにあるということです。そして3番目に、現在の大学がそうなりつつあるような競争主体ではなく、協力社会を作り上げる場での結節点として、在野の研究所は意義を持つと考えています。現在、大学においてCOEというものがありますが、これは神経系のニューロンのように、上の方向（経済産業省や総合科学技術会議など）に全ての矢印が向いており、研究者間の横の協力関係が作れなくなっています。これに対して私は、新しい組織イメージとしては、相互結合型のネットワークが重要だと考えています。ある種の分散型ですが、全てが中心とはならないネットワークという形として、新しい総合学術情報システムを作ることができるでしょう。

次に世界史研究所が目指すサイバー研究所の方向として、具体的に4つのことを挙げたいと思います。

先ず情報の共有という点です。ネットワーク上では、「コピーライト」ではなく、「コピーレフト」という考え方方が生み出されていますが、知的財産権とか知的所有権の独占を許すのではなく、むしろその公有の道筋を考えていこうといふことです。また、情報の送信・受信という理念的な関係ではなく、みなさんが情報の受け手であると同時に、情報発信の主体になるような相互補完性や互集性に基づく関係を作る必要があると思います。その上で、ネットワーク空間に存在する多様なメディアを情報の共有ないし公有という方向に向かって積み重ねていかなければならぬでしょう。

次にサイバー空間のフォーラムの形成という点です。サイバー空間は距離や時間をある程度越えることが可能であります。しかしながら、対面的共同性というものも必要だと思います。このことは、具体的にどういう形で対面的共同性に基づく意見交換の場を作っていくのかということと関連します。意見交換のフォーラムというのも、どこかの中心に全員がアクセスしていく関係ではなく、それぞれの主体が形成する関係というものも考えられるのではないかと思います。

第3の点は具体的な問題です。第1は文献目録であります。現在、いろいろな主体が形成しつつある文献目録を統合して生成する目録というものが作られています。2番目に、資料もそのような形でどんどん作られていて、海外では既存の文字資料の電子化だけでなく、オーラル・ヒストリーなどを通じて具体的に資料を新たに作り出していく作業が進められています。3番目はマルチメディア資料の可能性ということです。サイバー空間では、音声や映像を直接の資料と考えることができます。この可能性を考えていくことも、一つの大きな主題になると思います。

第4の点は教育です。研究だけではなく、特に教育という観点からマルチメディアをどのように活用するかを検討しなければなりません。現在、ダイナミック・シラバス（シラバス）というものがあります。これは講義に必要なリソースや文献など、関連する情報を集積して1つの大きなシラバスを作成するものです。すなわち、1回の講義だけではなく、それに関する教育資料の形成に関わるものであります。

ネットワーク空間については様々な考え方があり、大きく分けると、モダニストの考え方とポスト・モダニストの考え方があると言われていますが、まだその方向性は見えていません。従って、私たちがサイバー空間の中でどのように議論し、意思形成していくのかについて、様々な議論を念頭において考えていく必要があるのではないかと思います。

最後に、なぜ今、世界史を考えなければならないかについてお話しします。私は、3つの現実から今、私たちは挑戦を受けていると考えています。1つは、1970年代頃から情報資本主義・知識資本主義といわれる新しい時代に足を踏み入れていることがあります。2番目は、グローバル資本主義によって世界の構造化、あるいは平準化が進行していることがあります。3つ目は、ネオ・リベラリズムと呼ばれるシステムによって、私たちが議論を交わす社会や共同性、公共圏が消されつつあるという点です。

情報資本主義の時代とは、最近よく聞く知識基盤社会というものです。すなわち、ものを作ることではなく、知的財産権など、プロパティが最も重視されていく資本主義の形態です。広い意味では知識の格差・差異を通じて蓄積を行うという、純粹的な形態の資本主義であるという議論があります。新自由主義については、ドイツでは「競争と社会の脱政治化を通じたヘゲモニー」という定義があります。まさに競争社会と、国家に対抗する市民社会から政治性が抜き取られ、その上にヘゲモニーが形成されるということです。それから人間については、アイデンティなどを語るのではなく、フレキシブルな存在でなければならぬとされます。ですから、競争と個人が分断されていく中で、どのように共同性や社会を構想していくのかを、世界史の観点から議論する必要があると思います。また、特にラテンアメリカなどではネオ・リベラリズムやグローバリゼーションに対する批判の動きが盛んであります。したがってネオ・リベラリズムは、まさに近代、ここ500年の問題として議論されなければならないと思います。

世界史には、普遍史とかグローバル・ヒストリーといったいろいろな議論があります。しかし基本的には、私たちが共同性というものを構想していく中で、私たちの考える世界史が生み出されていくのではないかと期待しています。

世界史教育の現状と課題

鳥越 泰彦（麻布中・高等学校教諭）

現在、日本の世界史教育はどのようにになっていて、どのような問題点をかかえているのか？筆者の経験、すなわち高校での世界史教育、および大学での地理歴史科教育法の講義から上記の問い合わせに答えてみたい。なおこの小論では、高校世界史教育の現状と課題を分けた上で、それぞれについて教育内容上の視点からと教育方法上の視点から分析をしたい。

1 現状

1-① 世界史教育内容の現状

現在、世界史は「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に生きる民主的・平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う」教科と文部省（当時）が位置付けた地理歴史科に属する。世界史はこのなかで唯一の必修科目であり、中心的な位置づけを与えられている。なお昨年（2003年）度の高校1年生から、新たな指導要領が実施されているが、文部科学省では、地理歴史科の意義、そのなかでの世界史の位置づけについては大きな見解の変化を見せてはいない。

では実際の世界史教育はどのような内容で行われているのだろうか。その詳細を述べるのは、紙幅の関係上もまた能力的にも不可能だが、現在、使われている教科書の構成をつかむことで、その概観を確認しておきたい。

まず新指導要領で「世界史への扉」という項目ができた。人々の時間認識、空間認識の変化を扱う「世界史における時間と空間」、衣食住やスポーツなどと歴史の関わりを扱う「日常生活に見る世界史」、そして「世界史と日本史のつながり」といった内容が世界史への導入として教科書に載っている。さらにこれらの項目ごとに課題追究が求められ、設問が用意されるようになった。

次に世界史の構成についての特徴であるが、それは第1に、前近代における独自の「地域世界」的理解とネットワーク論、第2に、「主権国家体制」という概念の導入ならびに「大航海時代」理解の変化、そして第3に、現代として、そして「地球世界の形成」として20世紀を一括りにとらえるということにまとめられると思う。

第1の特徴は、前近代の世界をいくつかの「地域世界」に分け、その地域世界の特徴を理解するとともに、それらをつなぐネットワークを強調するということである。前近代をいくつかの「地域世界」にわけて理解するという手法はある意味、日本では常識化しているが、世界的に教科書を比較してみると必ずしもそうでもない。すなわちこれは日本的な世界史理解の方法なのである。第2の特徴の前半は、「絶対主義」という語句が指導要領から消滅し、代わって「主権国家体制」という用語が重要視されている。また後半は、近代の契機の一つとして理解してきた「大航海時代」について、それがアジアの繁栄とアジアにおける交易圏の発展によるものだという理解が主流になったことを指す。よって教科書によって

は、ヨーロッパの「大航海時代」の前に、明・清帝国、オスマン帝国、ムガル帝国の繁栄を述べるものが増えた。そして第3の特徴は、必ずしも戦後史だけを現代とせず、総力戦や地球一体化の観点から、20世紀をひとまとまりに扱うという視点が強調されてきたことを意味している。

最後に別の観点から世界史教育の現在的特徴について、いくつか指摘をしておきたい。まず生徒が世界史の近現代史を中心に学んでいることである。学校5日制のなかで授業減となった高校では、近現代史を中心とした世界史Aを選択するようになっている。またこれは世界史の教育内容と直接関係するわけではないが、新指導要領下の教科書では、図版がほぼ全てカラー化されたことも指摘しておく。生徒には「今までの教科書より読む気になる」と好評である。

1-② 世界史教育方法の現状

次に世界史をどのように学ぶのか、という問題についてその現状を分析していきたい。参考に指導要領を読んでみると、例えば世界史Bでは「世界の歴史の大きな枠組みと流れを、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての資質を養う」とある。しかし筆者が行っている大学での講義に参加する学生たちは、世界史教育にはこのような理念と方法論が定められているのに、自分の高校世界史教育とあまりに違うことに驚く。

ではどのような世界史教育が高校で行われているのか。これを一概に述べるのは、教育内容を論じること以上に難しい。けれども全国的に見れば、実はかなり教育方法は似通っていると思われる。大学生に聞くと、それは講義形式のみで、教科書を読み板書を写すか、教師作成のプリントの穴埋めをする、というものが圧倒的である。また授業はとても静かで、世界史が好きな者は熱心に授業を聞くが、他教科の勉強（いわゆる内職）をしたり、寝ている生徒もいたという。そして試験は暗記が勝負だったと言う学生がとても多かった。

勿論、上記のような教育方法に疑問を感じ、いろいろな実践を試みている例もある。その成果を無視するつもりは毛頭ないが、現実にはそのような実践は広がっていないと思う。

また日本の高校世界史教育では、いわゆる「範囲を全て終わらせる」ことに非常に努力が払われているように見える。通史を終わらせるためには、「効率のよい」講義形式やプリント穴埋め方式をとるしかない、ということを耳にする。だがそれでも多くの学生は高校で現代史を学んでいない。

2 世界史教育の課題

2-① 世界史教育内容の課題

では上述のような現状に対し、どのような課題があるのか述べる。その際に筆者は「高校生は世界史で、何をどのように学ぶのか」と問い合わせたい。従って世界史教育内容の課題として「何を学ぶのか」を問題としたい。

なぜこのような問い合わせをするのか？それはこの問い合わせに世界史教師は無意識だと思うからである。すでに現在の世界史の構成や教育の現状について述べた。これに関して言

えば世界史の「地域世界」から排除されている地域の歴史はそのまでいいのか？そもそも通史は必要なのか？とか世界史A重視の中で、20世紀史をどう考えるのか？などが問題である。指導要領のように、20世紀を地球一体化の時代とするとしても、一体化の不均等さを考慮することや、2次大戦後の歴史を冷戦以外の軸でみる歴史像が求められている。

また現在の世界史の構成が、数ある世界史像の一つでしかないことも意識されるべきである。日本では「世界史で何を学ぶのか」または「世界史とは何か」ということについて、多くの議論がなされてきた。しかしそれが十分に高校教育に活かされているのだろうか。現実には世界史教科書がAとBあわせて22種類ある。だから22種類の世界史像が提示されている。しかも現在の指導要領と教科書の世界史像は、歴史的に変化してきたものである。しかしそのような多様性と変化の歴史を、世界史教師は十分に受け止めずに、世界史教科書を選択し授業を行ってきたと筆者は思う。なぜなら、例えば特定の教科書が「オーソドクスな世界史教科書」だと言われたりするからである。「オーソドクスな世界史」とは何なのか？そのようなことが言えるのは、世界史像の多様性を認めていないからではないのか？

またいわゆる「教科書問題」もある。我が国では教科書検定制度が続いている。ゆえに世界史教育に一定の内容統制が続いている。しかも教科書の減少も問題である。世界史の教科書はA Bあわせて現在22種類あると書いたが、以前の指導要領では28種類あった。このような減少は、教科書のカラー化による。カラー化によりコストがかかるのに教科書価格は変わらず、教科書の出版は出版社に負担になっている。教科書を低価格にすることは重要だが、それ故に教科書改善と世界史像の多様化が阻まれつつある。

2-② 世界史教育方法の課題

次に世界史教育の課題として、その方法論的問題を検討する。すなわち「世界史で高校生はどのような学力をつけるのか」を考えたい。

このように問うと「世界史の学力」が問われることは極めて少ないと気づく。「用語の暗記だけでなく、流れの理解が必要」とか「でも受験があるから、暗記重視になってしまう」という言説が登場するくらいだ。そしてこのような認識が、現状の授業とテストを支えている。

しかしこれらの言説は妥当なのか？「受験があるから、暗記重視になってしまう」のだろうか。確かに世界史入試は概して言えば、用語の暗記量が重視される。しかし全ての高校生が大学受験をするわけではないから、受験しない生徒には別の世界史教育法が行われてもよいはずだ。しかし「自分以外は大学受験する人はいなかった」という高校を卒業してきた大学生でもいわゆる受験校と変わらない世界史教育を受けてきている、というのが筆者の経験である。実は「受験があるから、暗記重視になってしまう」のではないのではないか。次に「用語の暗記だけでは不十分で、流れの理解が必要だ」について。筆者はこの言説にも大きな問題があると思う。「流れの理解」は「用語の暗記」よりも無味乾燥でないとしても、「流れ」を語るのは教師である以上、生徒はその「流れ」を理解させられる。極論すれば「流れの理解」は「歴史記述の暗記」でしかない。ある意味「用語暗記」も「流れの理解」も同じレベルではないのか。

このように生徒は、主体的に歴史を学ぶということを否定されて続けている。このことは深刻だ。なぜなら主体的に学ぶ機会を奪われているため、生徒にとって世界史は暗記でしかなく、世界史を学んでも、それをもとに彼らは現状分析をする力を持てないと思うからである。だから「生徒が主体的に学ぶ世界史」が真剣に考えられるべきだ。しかし障害は多い。第1に実は文部科学省は「生徒が主体的に学ぶ」ことを求めてはいない。指導要領には「生徒に…を理解させる」と教師を隠れた主語にして、生徒を学ぶ主体として認めない文章しかることがその証拠である。第2に教科書も「生徒が主体的に学ぶ」ことを阻んでいる。教科書には単語のゴシック体がならび、「問い合わせ」がないからである。このような形態の教科書は、欧米と比べると非常に特殊である。そして決定的なのは教師の意識が変わらないことだ。世界史教師はかつて、暗記重視の世界史教育に対応できた生徒だから、暗記重視の方法に疑問を持たないのである。

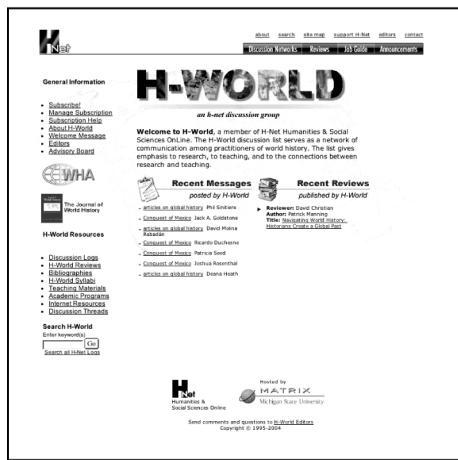
3 最後に

以上、日本の高校世界史教育の現状と課題について述べた。深刻なのは、世界史教育の現状と課題が大学入試と指導要領からのみ語られてしまうことにある。これらはその1つでしかない。むしろ意識化されていないという点で、教師の世界史像、世界史学力観、世界史教育方法が問われていないことが、世界史教育の課題としてはより根深い問題なのである。



Web 世界史

毎回 Web や CD-ROM など電子化された世界史研究情報を紹介していきます。
なお世界史研究所のウェブサイトにもここで紹介したものを掲載しています。



▲ H-World Disscussion Network トップページ
<http://www.h-net.org/~world/>



▲投稿された書評も閲覧できる。
上の写真は Patric Manning 著 *Navigating World History* の書評 (PDF ファイル)。
同書の概要については、世界史研究所ニュースレター No.1 を参照。



▲ H-Net トップページ。
<http://www.h-net.org/>
人文・社会科学に関する多数のディスカッション・グループが存在する。

H-World Discussion Network

<http://www.h-net.org/~world/>

今回紹介するのは H-World Discussion Network です。ご存じの方、既に登録されている方もいらっしゃると思いますが、人文・社会科学系のディスカッション・グループ、H-Net (<http://www.h-net.org/>) の世界史版です。H-Net は対象の地域や主題ごとに約 160 のグループに分かれており、そのグループのひとつである H-World では、研究者・教師などがメーリングリストを通じて世界史に関する議論を行っています。参加方法は名前と E-mail アドレスを登録するだけですが、登録しなくても過去にメーリングリストに投稿された記事や Book Reviewsなどを見ることができます。

一般論として言えば、H-Net のようなインターネットを介して議論を行うためのディスカッション・グループやメーリングリストのメリットには、過去の議論をログとして保存し、遡って容易に検索・閲覧できることや、参加者が通常束縛されることになる時間・地域を超えて議論に加わることができる点などがあります。他方でメリットにもデメリットにもなりますが、あらかじめ論題や司会進行役、時には最後の総括まで決まっている国際会議などと違い、議論に対して非常におおまかな枠組みしか設定しない（できない）という点も特徴です。登録している複数の参加者が一齊に発言することになり、議論が散漫になってしまうこともあります。

H-Net は各国史や各テーマごとのディスカッション・グループで形成されていますが、H-World ではナショナルな枠組みを超えた歴史として世界史 (World History) を広く定義し、多分野の参加者たちがメーリングリストを通じて地球規模での歴史をディスカッションできるような枠組みで運営されています。世界史はまた、古代や近代の “civilization” の歴史としてあるのではなく、人類の進化から現在のグローバル化の進展までを含む “Big History” であると趣旨の中で説明されます。したがって、メーリングリストを通じた議論も多様なテーマで飛び交っています。最近の投稿では、メキシコ征服についての話題があったり、グローバリゼーションの起源についての話題が同時に投稿されていたりと、一度に議論される論点は様々です。さらには、研究上の議論だけではなく、どのように世界史を教えるかといった歴史教育に関する投稿もあります。

H-World ではこうした問題関心も研究分野も異なる人々が互いに議論をし、相互の認識を深めていく過程で、世界史を比較・相互作用に基づき、地域横断的な歴史として描こうとしています。いわば、その運営の手法自体が世界史をどうとらえるかという認識を反映したものだと言えます。そう考えれば、インターネットを介したディスカッション・グループやメーリングリストというものは、世界史についての議論を行うのに、適しているのではないかでしょうか。世界史を議論するにあたって、どこかに中心性や問題枠組みを設定してしまうのではなく、多様な参加者たちが各自の研究・経験に基づく主張を通じてネットワークを形成していく、H-World の運営者たちはそう考えた上で、“Big History” と言っているのかもしれません。またこれは、7月10日の世界史研究所開所式で小澤氏が、世界史研究所の方向性としてお話しされた内容（本ニュースレターの2P 参照）とも一致する点です。

ところで H-World では、日本の研究者の発言がなかなか見つかりませんので、興味をお持ちの方は是非議論に参加してみてください。過去に投稿されたことのある話題でも、歓迎してもらえると思います。また、世界史研究所でも同様な試みを行ってみたいと考えています。

世界史研究所からのお知らせ

世界史キャラバン開催～長野県松本市 講演テーマ『日清・日露戦争の時代』

世界史研究所では、2003年までNPO-IF (<http://www.npo-if.jp/>) が行ってきた「世界史キャラバン」の活動を継承しています。これは日本と世界(特に東欧、東南アジア)の価値のある歴史・文化をより広く理解していただくために、日本の各地の町や村で講演活動をおこなうものです。2003年の初回は新潟県南魚沼郡大和町に伺いました。(2003年の講演内容については世界史研究所のウェブサイトに掲載しておりますのでご覧下さい。)

本年は11月27日に長野県松本市で、4名の講師の方に「日清・日露戦争の時代」をテーマとしてご講演いただきます。今回は日清戦争から110年、日露戦争から100年後の現在から当時を振り返り、その世界史的意義を考えてみようという趣旨で企画されました。会場は、長野県松本市東山山麓にある馬場屋敷です。これは重要文化財に指定されている江戸時代の豪農の屋敷です。世界史を考えるにあたって、地元の方にも参加していただきながら、議論を深めたいと考えています。

詳細は世界史研究所のウェブサイト (<http://www.npo-if.jp/riwh/>) でご案内いたします。ご興味をお持ちいただけましたら、研究所までご連絡下さい。(メールアドレス: world_history@npo-if.jp)

開催内容のご案内

【講演テーマ】

日清・日露戦争の時代

【日程・場所】

開催日: 2004年11月27日

場 所: 長野県松本市

(重要文化財 馬場屋敷)

【パネリスト】

南塚 信吾 (世界史研究所所長)

田中 一生 (世界史研究所顧問)

木村 英明 (世界史研究所研究員)

趙 景達 (千葉大学教授)

世界史懇話会開催のお知らせ 2004年12月14日、P.マニング氏を囲んで

世界史研究所では、12月14日(火)にノースイースタン大学教授のパトリック・マニング氏をお呼びして研究懇話会を開催することとなりました。マニング氏は、今年閉鎖されてしましましたがWorld History Centerで所長を務め、昨年は著書 *Navigating World History: Historians Create a Global Past.* (Palgrave Macmillan, 2003) を出版されました。(同書についてはニュースレターの第1号に紹介がありますのでご参照下さい。) 懇話会ではマニング氏を囲んで世界史に関する幅広い議論を行いたいと思います。詳細については後日皆様にご案内申し上げます。

なお、研究所では今後も月1回程度、様々な方をお呼びして研究懇話会を開催していく予定です。



▲所長、南塚信吾氏による世界史研究所設立にあたっての趣旨説明

世界史研究所開所式の様子

2004年7月10日(渋谷、アイビスビル10階にて)

7月10日に、世界史研究所開所式を無事終えることができました。当日はあいにくの天気でしたが、多くの方がお集まり下さいました。ご出席下さった皆様、誠にありがとうございました。

開所式では、所長の南塚信吾氏による研究所設立の趣旨説明に始まり、研究所ウェブサイトの説明、千葉大学教授の小澤弘明氏による講演が行われました。趣旨説明では現在の社会にあって世界史を研究する意義や、今後の研究所の活動方針の説明があり、特に電子化された研究所として運営されていくことが示されました。また、小澤氏からは国の機関などに属しない在野の研究所、電子化された研究所の意義と課題についてお話しいただきました。(小澤氏の講演内容については、本ニュースレター2Pを参照。) 南塚氏、小澤氏の講演によって、世界史研究所が今後進むべき道が具体化されたと思います。

また、開所式終了後には懇親会が開かれ、研究所顧問の西川正雄氏、下村由一氏の他、ご出席者の方々から研究所設立に際して望まれることなどをスピーチしていただきました。

多数の方々に注目されながら研究所を発足させることができたことに大変感謝しております。当日、お話しいただいたことをふまえて、今後の活動を進めていきたいと考えています。



▲会場の様子

Research Institute for World History, Newsletter, No. 2

A Specter Is Still Haunting: The Specter of World History. (Abstract)	Masao Nishikawa (1)
The Future of RIWH as a Cyber Institute. (Abstract)	Hiroaki Ozawa (2)
The Present Situation and Problems of World History Teaching in Japanese Highschools.	Yasuhiko Torigoe (3・4)
WEB World History (A review of electronic materials for world history)	(5)
Announcements	(6)

The Research Institute for World History was founded in July 10, 2004 in the framework of NPO: International Forum for Culture and History that was founded in Tokyo in 2003.

The Research Institute for World History is intended as a cyber institution for helping and developing research and education of world history. World history means not collections of regional and national histories of the world but history of world as a whole.

Purpose of the Institute:

- To promote research and education of world history in Japan
- To collect and provide information on research and education of world history
- To popularize the necessity of world history in Japan
- To keep contact with other institutions and groups concerned with world history

Activities:

- To maintain a website on world history
- To organize academic meetings and projects on world history
- To offer meeting places for the academic groups on world history
- To make book reviews on world history
- To publish books on world history

Office:

Research Institute for World History
2-17-3 Shibuya, Shibuya-ku, Tokyo, Japan, 150-0002
Tel. +81-3-3400-1216 Fax. +81-3-3400-1217
<http://www.npo-if.jp/riwh/>

Researchers:

Shingo Minamizuka, Director (Professor, Hosei University)
Hideaki Kimura, Researcher
Hiroyuki Yoshihashi, Phd. Researcher

Advisory Board:

Ivan T. Berend, Adviser (Professor UCLA)
Masao Nishikawa, Adviser (Emeritus, University of Tokyo)
Yuichi Shimomura, Adviser (Emeritus, Chiba University)
Kazuo Tanaka, Adviser

世界史研究所 連絡先・地図

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-17-3
渋谷アイビスビル8F

TEL 03-3400-1216
FAX 03-3400-1217

E-mail world_history@npo-if.jp
URL <http://www.npo-if.jp/riwh/>

※研究所への電話でのご連絡は、
水曜日・金曜日の午後にお願いいたします。

